

2010年10月8日
JSPS ロンドン

2010年9月16日に公表されたTimes Higher Education WORLD UNIVERSITY RANKINGS 2010-11（以下「THE」という）では、アメリカが10位までのうち7位を占め、200位までに72大学がランクインし、他国を圧倒している。アメリカの強さに関しては、教員の給与の高さ、世界各国から優れた人材を惹きつける国際的に洗練された雰囲気、影響力のある学問的なネットワークに加え、高等教育分野への投資が、他国と比較して約2倍となっており、GDPに占める割合も3.1%（他国平均1.5%）と飛びぬけていること、などを上げている。

また、中国の台頭が目覚しく、21位にアジアで最高位の香港大学がランキングした他、合計10大学がランキングしている。一方、日本については、東京大学、京都大学がそれぞれ26位、57位とランキングしたが、他の大学は100位以内には入っていない。過去のTimes Higher Educationのランキングが日本の大学に寛大すぎたとしており、現在のランキングシステムは日本の大学システムの質を正確に反映しているとした。また、2010年6月にThomson Reuters社が公表した「GLOBAL RESEARCH REPORT」では、日本の研究成果の停滞と国際共同研究の限界について焦点を当てていたことを引用し、日本の国際化への失敗は、長期的な研究重視型大学に対する問題を引き起こすことになるだろうとした。

そのほか、アジア諸国が高等教育分野に重点的に投資している。同様の傾向はドイツにも見られ、2010-15年に科学、研究、発展のために€150億を追加投資する。

なお、今回の指標は以下の通り。

【Teaching-the learning environment 指導-学習環境：30%】

Reputation Survey

2010年春に経験豊かな学者を対象に質に関する（意見）調査を行った。13,388の回答が様々な地域・分野の学者から寄せられた。この調査項目は、指導項目の50%の割合を占め、調査全体の15%の割合を占めている。

Undergraduates admitted per academic

機関（機関の大きさは教員数による、以下同）別の入学者数。教員対生徒の割合で、この指標は、学生に対していかに注意が払うことができるかを示すものとしている。この指標は、前回までは20%の割合を占めていたが、今回は、指導項目の15%、調査全体の4.5%を占めている。

PhD awards/ bachelor's awards

機関ごとのPhD取得者数に対する学部在籍者数。研究をしている学生が多ければより知識集積型であることを示し、活動的な大学院生コミュニティの存在は、学部生と大学院生によって同じように研究指向型の指導環境が評価されていることを示すもの、との考え方による。この指標は、指導項目の7.5%、調査全体の2.25%を占めている。

PhD awards per academic

機関別のPhD取得者数。当該機関が次世代をどのように育成しているのか、大学院生が学部

生に対して優れた指導をする割合の高さは、学部生にとって非常に魅力的であり、彼らが良い経験をできることを意味する。この指標は、指導項目の20%、調査全体の6%を占めている。

Income per academic

教員数に対する機関の収入の割合。収入とは、すべての国家等を平等な条件（購入平価）で比較し、学生や職員が利用可能なインフラや施設のなどにかかる費用をさす。この指標は、指導項目の7.5%、調査全体の2.25%を占めている。

【Research-volume、income、reputation 研究-量、収入、質の評価：30%】

Reputational survey

研究者は、特定分野の研究部門の質等についてより精通しているという理由により、研究項目の65%、調査全体の19.5%の割合を占めている。

Research income

職員数と購買力平価。この指標は、国の政策や経済状況によって影響をうける可能性があるため、議論の余地はあるが、研究収入は世界クラスの研究をするためには重要な事項である。研究の質（質は、ピアレビューによって評価される）が良ければ、得られる収入も増加すると考えられる。この項目は、研究項目の17.5%、調査全体の5.25%を占めている。

Papers per academic research staff

職員数に対する研究のボリューム。Thomson Reuters社に掲載された論文数に対する職員数の割合をカウントし、当該機関が質の高い論文審査のある論文誌に掲載される能力について示している。この項目は、研究項目の15%、調査全体の4.5%を占めている。

Public research income/total research income

研究に関する総収入に対する公的研究にかかる収入の割合。この項目は各国間の自己申告のデータの比較可能性を反映しているため、それほど重視視していない。この項目は、研究項目の2.5%、調査全体の0.75%を占めている。

【Citations-research influence：32%】

引用数は、比較的高い水準で信頼性がある世界的な学術団体が、研究の質を表すものとみなしている。研究の質を引用数で表すことには議論の余地はあり、前回よりも占める割合は大幅に縮小している。しかし、引用数と研究成果には強い相関関係についての明確な証明もある。当該データは、Thomson Reuters' Web of Scienceに掲載された12,000の論文を用いている。このデータは、2004年から2008年の5年間分を集計したものである（2009年、2010年に出版された論文に関して十分なデータ量ではない）。従来のランキングとは異なり、すべてのデータについて、分野間での引用数量の変動を反映した標準化を行っている。このことによって、伝統的に引用数が多かった分野で高いレベルの研究活動を行っている機関が、偏った利益を得ることはなくなった。

【Industry income-innovation:2.5%】

この分野は、機関の技術移転（産学連携）を評価している。当初、この項目は次年度の付加的な指標と捉えていたが、現在では、技術移転を計る重要な指標だと認識している。企業側が

研究のためにどれだけ資金を提供する用意があるのか、大学が商業市場において資金を獲得する能力については、質を示す指標となる。しかしながら、今回のデータ（この指標を使った機関ごとの数値）は不完全であり、2010-11年のランキングでは、全体の2.5%を占めるものとする。

【International mix-staff and students 外国人職員と留学生：5%】

最後の指標は、キャンパス内の多様性。当該機関のグローバル化がどれだけ進んでいるかの兆候は、機関の見解である。世界中から優秀なスタッフを集めることはグローバル化の鍵となる。教職員の（労働力の）市場は国際分野を対象としており、この指標は国際競争力を示しているが、データは地理的な条件が結果に影響しており、前回のものよりもウェイトは下がっている。この指標は、国際項目の60%、調査全体の3%を占めている。

他の指標は、国内の学生に対する留学生の割合を用いている。この指標も生徒の質を計ることができなかつたり、地理的な問題や学費の制度に起因する課題があることを踏まえ、国際項目の40%、全体の2%を占める程度となっている。

【その他】

調査対象

- ・ 学部生の教育を行わない大学、研究成果として年間50以上の論文が主要誌に掲載されない大学、単一学科のみの大学、はランキングの対象とならない。